

【事例紹介】

国際教育従事者の人材育成とネットワーク構築

-BRIDGE Institute の取組と挑戦-

Cultivating Intercultural Educators' Competencies through Trainings and Networks:

Current Activities and Future Challenges of BRIDGE Institute

名古屋大学国際機構国際教育交流センター特任助教 川平 英里
KABIRA Eri
(International Education & Exchange Center, Nagoya University)
名古屋大学国際機構国際教育交流センター講師 星野 晶成
HOSHINO Akinari
(International Education & Exchange Center, Nagoya University)

キーワード：国際教育、人材育成、異文化理解、FD・SD

1. はじめに：今日の教育機関における国際教育従事者の課題

近年、グローバル化の進展に対応した教育改革が大きな課題であり、大学や高校では「スーパーグローバル大学創成支援事業」(SGU)、及び「スーパーグローバルハイスクール事業」(SGH)等の文部科学省の競争的補助金事業を通して、教育の国際化が推進されている。結果、正課内外教育において多様な国際教育プログラムが展開されている。これらのプログラムの多くは、2008年頃から経済界と教育界が連動しながら取り組んでいる「グローバル人材育成」を主軸としている。「グローバル人材育成」を目指す教育実践では、学生の到達目標として語学力向上や知識獲得のみならず、異文化対応力や多様性理解、自主性の涵養、柔軟性や多面的な視点の獲得など、非知識型の能力・資質向上を掲げている(経済産業省, 2010; 文部科学省, 2011)。後者に力点を置くプログラムの多くは、海外留学や日本国内での外国人留学生との共修・交流といった異文化接触機会を提供する形態を採用している。

一方、文部科学省の競争的補助金事業の実施にあたっては、担当者及び実務者が申請時に記載した数値達成(人数・点数)に気を取られるあまり、送り出し・受け入れ等の定量的な視点を重視したプログラム開発・運営がなされるケースも少なくない。その結果、昨今では質の高い国際教育を担う人材の育成と獲得が各機関における課題の一つともなっている。したがって、今後の取組においては、海外留学や異文化接触機会を中心とした国際教育機会の更なる拡充に加えて、学びの質を保証するための国際教育プログラムの理論研究及び、実務担当者の支援・研修の充実が重要となる。

2. BRIDGE Institute 設立の経緯とミッション

上述の背景により、教育機関における国際教育従事者は、それぞれが持つ教育的資源を他者と共有し、実践の質向上に向けて学び合う機会に恵まれていない。この現状を改善し、国際教育従事者の育成とプログラムの質向上を図るため、立命館大学堀江未来教授を代表とする大学の教職員（国際教育関連分野での研究・実務経験を持つ者）、及びこの分野に異なる立場から携わる社会人が集い、2013年にBRIDGE Institute¹ (Building Resources In Diversified Global Education) を立ち上げた。本稿の執筆者2名は、その中心メンバーであり、現在は16名のメンバーが活動している。BRIDGE Instituteは有志による任意の教育・研究・実践組織であり、現在、社団法人等の法人格は取得していない。

設立にあたって、BRIDGE Instituteは以下の2点を目的として掲げている。

- ① 世代や違いを超えて互いに学び合えるようなネットワークの構築
- ② 国際教育分野に情熱を持つ者の交流を通じた、国際教育に関する新たな知識や実践の創造

この目的を達成すべく、国際教育・異文化理解分野でのキャリア構築を目指す人を募り、国際教育の理念、理論、実践について包括的に考え、現場で活かすうる応用力を培う研修等を企画・実施してきた。

3. BRIDGE Institute の活動概要

BRIDGE Instituteの主たる活動は「国際教育分野の人材育成ワークショップの開催（複数日または1日）」、「国際教育関連企業・組織からの受託事業の実施」、「研究調査活動」の三形態に分けられる。表1は、これまでの主な活動と実施時期を年表式にまとめたものである。

表1 これまでのBRIDGE Instituteの活動経歴

年月	活動概要
2013年	立命館大学堀江未来氏を中心とする有志で、BRIDGE Instituteを立ち上げる
2014年 8月	第1回BRIDGE Institute「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ」開催 8月22-24日 於 宇多野ユースホステル（京都）
2015年 8月	第2回BRIDGE Institute「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ」開催 8月21-23日 於 タナベ名古屋研修センター（愛知）
2016年 9月	第3回BRIDGE Institute「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ」開催 9月2-4日 於 立命館大学いばらきキャンパス OIC セミナーハウス（大阪）

¹ BRIDGE Institute (Building Resources In Diversified Global Education)
HP: <https://www.bridgeinstitute-international.com>

2017年 1月	受託事業：「高校向け海外研修旅行の事前・事後学習プログラム開発」JTBコーポレートセールス -高校生向け教材開発『コミュニケーション基礎力&異文化理解・自分NOTE(第2章「異文化理解」第3章「自分NOTE」)』及び国際交流センター講師対象研修の教案開発と実施 -中等教育現場における異文化理解教育の充実 -海外研修旅行の事前・事後学習プログラムの開発
2017年 4月	科学研究費助成金「国際教育プログラムの開発・普及・評価サイクルの構築：高大連携による学びの実質化」基盤研究(B)(研究課題/領域番号 17H02688)に採択 (2020年3月まで)
2017年 7月	講師派遣：JTBコーポレートセールス主催 大分県内公立/私立高等学校 学生対象海外渡航前研修
2017年 12月	第4回 BRIDGE Institute 「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ」開催 12月3日 於 立命館大学いばらきキャンパス OIC セミナーハウス 12月10日 於 立命館大学東京キャンパス
2018年 9月	講師派遣：一般社団法人 持続可能な国際教育推進のための研究コンソーシアム主催の 「国際教育に関わる教職員向け夏期研修」(予定) 9月5-7日 於 広島YMCA 国際文化センター
2018年 11月頃	第5回 BRIDGE Institute 「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ」開催(予定) 場所未定

3.1. 「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ」

BRIDGE Institute は毎年ワークショップを開催している。2016年までの3年間は、2泊3日の宿泊を伴うプログラムを実施し、2017年は外部講師を招聘して1日のワークショップを東京と大阪で実施した(表2)。

2014-16年の宿泊型研修では、参加者の協働学習とアクティブ・ラーニングを中心に組み立てることで、研修を通して構築した人的ネットワークがそれぞれの教育現場の課題解決に繋がることをねらいとした。研修内容は「理論編」と「実践編」の2部構成とした。「理論編」では、国際教育や学習者の学びのあり方に関する国内外の研究調査の動向や、理論的枠組みについての講義を実施し、現場での国際教育活動の質向上に資する知識的基盤の構築を行った。具体的には、Intensity Factors of Intercultural Experience (Paige, 1993)、Intercultural Developmental Continuum (Hammer, 2012)、Developmental Model of Intercultural Sensitivity (Bennett, 2013)、そして Experiential Learning (Kolb, 1984) といった理論を2回のセッションを通して紹介した。《理論編セッション①》では、異文

化体験を通じた成長や変化についての理論と先行研究を学び、学習者の成長や変化を促す要素について学習した。続く《理論編セッション②》では、国際教育と「体験」から学ぶことの関連性を理解し、学習者が深く学ぶための仕組みづくりとそれを実践する教育者の役割について学習した。

表2 BRIDGE Institute のワークショップ概要

研修名	国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ				
実施年	2014年	2015年	2016年	2017年	
実施日時	8月22-24日	8月21-23日	9月2-4日	12月3日	12月10日
	(2泊3日)	(2泊3日)	(2泊3日)	(1日)	(1日)
研修場所	京都	愛知	大阪	大阪	東京
参加者	20名	18名	20名	28名	33名
研修内容	<p>【1日目午後】 インTRODクシヨン 自己紹介&アイスブレイキング セルフリフレクシヨン 《理論編セッション①》 「国際教育を通じて成長・変化するとは？」 -Intensity Factors of Intercultural Experience -Intercultural Developmental Continuum -Developmental Model of Intercultural Sensitivity 懇親会</p> <p>【2日目】 目覚ましアクティビティ 《理論編セッション②》 「学習者の学びを促す仕組みづくり」 -Experiential Learning 《実践編セッション》 グループプロジェクト 異文化体験シミュレーション</p> <p>【3日目】 グループプロジェクトの発表 フィードバック 全体リフレクシヨン クロージング</p>			<p>【午前】 オリエンテーション アイスブレイキング 《理論編セッション》 「異文化感受性を育てる国際教育（1）」 -Intercultural Developmental Continuum -Developmental Model of Intercultural Sensitivity -Intercultural Development Inventory</p> <p>【午後】 《理論編セッション》 「異文化感受性を育てる国際教育（2）」 -Intercultural Developmental Continuum -Developmental Model of Intercultural Sensitivity -Intercultural Development Inventory 《実践編セッション》 グループワーク・フィードバック 発表</p>	

ワークショップ後半の《実践編セッション》では、BRIDGE Institute が現場のニーズと課題を想定した事例を提示し、グループプロジェクトに取り組んだ。ここでは、前半で学んだ理論的枠組みを実践に落とし込むことを目的とし、理論学習を発展的に応用する力を育成するとともに、知識と実践の統合を試みた。研修最終日には、グループプロジェクトの成果を発表し、参加者及び講師との相互批評を通じて多角的に省察した。

また本ワークショップは、先述の「理論編」と「実践編」以外に、それぞれの教育現場でも活用で

きる「アイスブレイキング」、理論学習の内省化を促進させるための「セルフリフレクション」、異文化疑似体験・学習を目的とする「異文化シミュレーション」などを通して、参加型の学習モデルを参加者全員が実際に経験する。さらに、宿泊や懇親会をスケジュールに含むことで、2泊3日を通して参加者間に今後も学び合える人的ネットワークが構築できるよう支援した。

一方で、2017年の1日研修では、国際教育における異文化感受性の役割と重要性に焦点を当てたプログラム「異文化感受性を育てる国際教育」を大阪と東京の2ヶ所で実施した。理論的枠組みである Intercultural Developmental Continuum と Developmental Model of Intercultural Sensitivity をより深く学習することを主な目的とし、この分野の専門家であるメーカー亜希子氏(Interculturalist, LLC²)を米国から招聘した。同ワークショップでも従来の設計と同様に「理論編」と「実践編」の2部構成とした。「理論編」においては、異文化感受性に関連する基礎的理論とそれを測る指標(Intercultural Development Inventory: IDI)を取り上げた。グループディスカッションを含むセッションを通して、異文化感受性の基礎的知識について理解を深めた。「実践編」では、現場で実施されている実際のプログラムを題材として、「理論編」で習得した知識を応用しながら学習者の学びを促す仕組み(プログラムのねらい、内容、問いの立て方)についてグループメンバーと議論し、発表した。

2018年は、一般社団法人 持続可能な国際教育推進のための研究コンソーシアム³が主催する「国際教育に関わる教職員向け夏期研修」に、メンバーを講師として派遣し、同様の内容を実施する予定である。また、第5回の「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ(2018年11月頃開催)」に向けて、現在準備を進めている。

3.2. 国際教育交流関連企業からの受託事業：海外研修旅行の事前・事後学習教材開発

BRIDGE Institute では、2016年にJTBコーポレートセールスからの受託事業として、高校生を対象とした海外研修旅行の事前・事中・事後学習の教材開発に関わった(教材名『コミュニケーション基礎力&異文化理解・自分NOTE』)。同教材は3章で構成されており、BRIDGE Instituteは第2章「異文化理解」と第3章「自分NOTE」を執筆・監修している。上述したように、文部科学省の政策によって国際教育機会が高校にも拡充しており、語学研修やホームステイなどの海外研修旅行が多く実施されている。その一方で、送り出す高校の担当者(主に教諭)は海外研修旅行の学びを効果的に深めるための知識・情報資源や研鑽機会を十分に得られていない現状がある。そこで、BRIDGE Instituteは現行の教育研修を補完するための生徒用ワークブックを開発し運用を促した。また、事前・事後研修の担当者を対象とした講習用教案も開発し、該当者に研修を実施した。表3には、同教材(第2章及び第3章)の目次を示した。

² Interculturalist, LLC HP: <http://www.interculturalist.com>

³ 持続可能な国際教育推進のための研究コンソーシアム HP: <http://recsie.or.jp>

学習教材の第2章「異文化理解」では、文化の例え (Berardo, 2012)、体験学習の循環過程 (津村, 2012, Kolb, 1984) 等を紹介しながら、異文化における学びを促すことをねらいとしている。また、文化摩擦に対する理解を深めるために複数のケースも紹介している。また第3章「自分 NOTE」については、「第1部：事前学習」では、学習者が異文化経験を通じた個人目標を設定し記入することができるようになってきている。「第2部：研修中」では、研修中の経験を多角的に振り返ること

表3 『コミュニケーション基礎力&異文化理解・自分 NOTE』第2章「異文化理解」及び第3章「自分 NOTE」目次

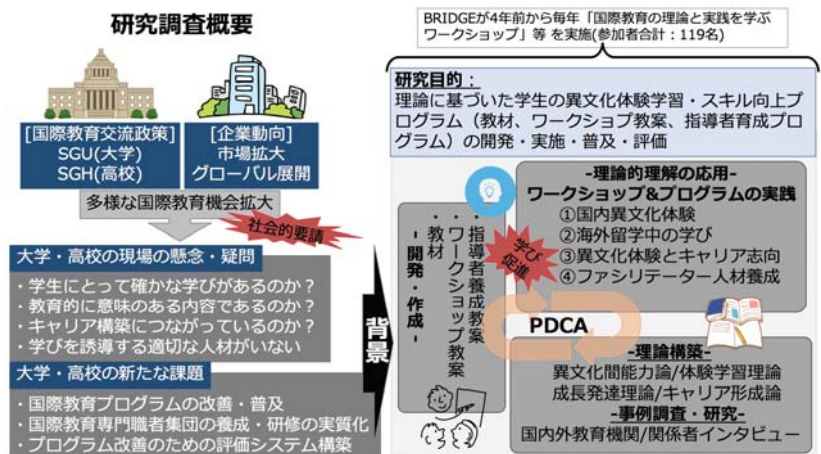
<p>第2章 異文化理解</p> <p>はじめに</p> <p>1. 文化とは？異文化とは？</p> <p>2. 検証「見える文化」と「見えない文化」</p> <p>3. 海外・異文化体験から学びを深めるには</p> <p>コラム1 気持ちのアップダウン</p> <p>第3章 自分 NOTE</p> <p>はじめに</p> <p>第1部 タビマエ：海外研修での学びを深める準備をしよう</p> <p>海外研修の目的は？：自分の人生の主人公になるために</p> <p>第2部 タビナカ：毎日の学びと気づきを記録しよう</p> <p>第3部 タビアト：経験を振り返り、次につなげよう</p> <p>1. 研修前に設定した「3つの身につけたい力」はどの程度ついたと思いますか</p> <p>2. 3つのキーワードを使って、新しく発見したことや気がついたことを表現してください</p> <p>3. これからの自分はどうありたいですか</p> <p>4. 次の海外研修参加者へのアドバイス</p> <p>5. 感謝の気持ちを伝えましょう</p> <p>コラム2 リエントリーショック：日本に帰国してからの再適応</p>
--

ができる記述式のジャーナルを導入し、学習者が日々の経験の中で感じたことや考えたことを書き込むことで、自らの学びを振り返り、気づきを深める支援をする。「第3部：事後研修」では、海外研修での経験を包括的に振り返り、生徒自身が「知識・スキル・姿勢」の側面でいかに成長したかを評価し、具体的に説明することができるような課題を提示している。そして、より深く研修での経験を考察し、学習者が自らの力で学びを最大化できるような構造とした。なお、本教材の作成にあたり、Paige et al. (2004) も参考にしている。

3.3. 科学研究費助成金「国際教育プログラムの開発・普及・評価サイクルの構築：高大連携による学びの実質化」基盤研究 (B)

2017年には、科学研究費助成金に BBRIDGE Institute の教育・研究計画が採択されたことで、BRIDGE Institute の研究活動はさらに活発になっている。この研究は、以下を目的としている。

- ① 異文化体験学習関連諸理論に基づくアクティブ・ラーニング型国際教育プログラムの開発
- ② 高校・大学の実践現場における実証的な評価研究を通じたプログラムの実用化・実装化
- ③ プログラムを有効に活用できる人材育成機会及び開発・普及・



評価サイクルのパッケージ化と社会における発信・普及

具体的には、各セミナーにおける質問紙調査、インタビュー調査の実施、及び文献研究を行いながら、発足以来蓄積してきた情報や知識、実践経験をまとめて公表することで、国際教育従事者の現場での実践の質向上の一助とすることを目指す。今後、研究成果をワークショップに取り入れたり、学会等で発表したりするなど、調査研究と実践の統合を実現させながら活動を進めていく。

4. BRIDGE Institute が実施した研修の参加者の声と研修の課題

過去4年間で開催した研修では、毎回プログラムの評価アンケートを実施し、参加者の声をプログラム改善や新たな研修の開発に活用している。同評価アンケートによると、参加者の満足度は毎回概ね高く、毎年向上している。参考として過去参加者のコメントを紹介する（原文ママ）。

- 「様々な立場で国際教育に関わる人が参加したことで、思わぬ創発が起きて、とても刺激になりました。」（2014年）
- 「理論について再確認ができた。新しく学んだ理論をどのように実践に結びつけたら良いか理解できました。」（2015年）
- 「自分の将来したいことがより明確になった。留学してこの分野を学び、将来は日本の国際教育を担う一員になろうと思った。」（2017年）
- 「海外研修を1人で担当しており、参加者募集から事前・事後研修の計画・実施まで、試行錯誤する日々なので、とても参考になった。また、私に欠けているのは根本的な学びと気付かされた。」（2017年）

また、BRIDGE Instituteに対する改善点や要望については、毎年プログラム内容の見直しを実施し、その都度反映させている。一方で、取り扱う理論の更新、教育プログラムの実施方法に焦点を当てたファシリテーション研修の開発、学習者主体の教育手法に特化した研修の開催など、要望に対して未着手の部分も未だ残されており、引き続き検討を重ねていく。以下に参加者から頂いた改善点や要望の一部を紹介したい（原文ママ）。

- 「送り出しに焦点が置かれることが多かったようなので、受け入れに関する話ももう少しあるといい。」（2014年）
- 「国際教育の理論を更に深めたものが必要」（2014年）
- 「ファシリテーションの仕方について焦点を当てるセッションがあると嬉しい。」（2015年）
- 「実際に大学生のグループなどに、BRIDGEのアドバイスにそったオリエンテーションを実施する様子を見学したい。」（2017年）
- 「多様性の理論とワークショップの実施方法やサービラーニング／ピアサポートに特化した（異文化感受性育成）プログラム開催」（2017年）

今後も、より現場の実態や課題に即したプログラムを考案・実施することで、国際教育従事者の学びの質をさらに高めていきたい。

5. おわりに：今後の展望、課題

BRIDGE Institute は今年で設立から5年が経過した。発足以来 BRIDGE Institute は、国際教育プログラムの質の向上を目指し、国際教育従事者の人材育成と、関係者における人的ネットワーク構築に焦点を当てて活動を続けてきた。

これまでグローバル人材育成の取り組みの主眼は大学や高校に置かれてきたが、今後は、小・中学校においても急速に政策の策定・実施が推し進められていくことが見込まれる。実際、2019年度より、小学校教諭を含む全教職課程において外国語（英語）コアカリキュラム案が採用されることとなり、外国語に関する専門的事項の一つには「異文化理解」が含まれる。その到達目標には、「世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題を理解している。」及び「多様な文化的背景を持った人々との交流を通して、文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解している。」と明記されている。このことは、今後さらに幅広い教育段階の教員や実務担当者が、国際教育において学びの質を保証することができるように、より汎用性の高い教材を開発し、普及させる必要があることを示唆している。また、多様な学習者を想定した国際教育プログラムの開発・実施・評価の仕組み構築と、国際教育従事者の学びの機会の創出と拡充も急務であると言える。

また、産業界におけるグローバル化も加速の一途を辿り、市場はさらなる拡大を続けている。これに伴い、企業・組織内での文化的多様性に対する認識が広まることは明らかである。多文化的組織の中で、自主性を発揮しながら多様な他者と協働できる人材の育成は、時代の流れと切っても切り離せない、国際教育従事者に課せられた任務であると言える。

今後、各教育段階や分野における国際教育の課題とニーズを更に特定していくことで、より汎用性の高い教材・教案を開発し、実装化していくことを予定している。また現在 BRIDGE Institute は、異文化環境における学習者の主体的な学びを促すための知識、スキル、感受性を備えた「国際教育ファシリテーター」の養成に焦点を当てた調査研究にも注力しており、これに関する研修プログラムも開発する予定である。今後もメンバーそれぞれが自己研鑽を重ねながら、国際教育に関する質の高い学びの機会を広く安定的に提供できる仕組みを構築していきたい。

6. 参考文献

- Bennett, M. (Ed.). (2013). *Basic concepts of intercultural communication: Paradigms, principles, & practices* (2nd ed.). Boston, ME: Intercultural Press.

- Berardo, K. (2012). Four Analogies. In K. Berardo & D. K. Deardorff (Eds.), *Building Cultural Competence: Innovative Activities and Models* (pp. 61–68). Sterling, VA: Stylus.
- Hammer, M. (2012). The Intercultural Development Inventory: A new frontier in assessment and development of intercultural competence. In M. Vande Berg, R.M. Paige, & K.H. Lou (Eds.), *Student Learning Abroad* (Ch. 5, pp. 115–136). Sterling, VA: Stylus Publishing.
- Kolb, D. (1984). *Experiential Learning: Experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Paige, R. M. (Ed.). (1993). *Education for the intercultural experience*. Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- Paige, R. M., Cohen, A. D., Kappler, B., Chi, J. C., & Lassegard, J. P. (2004). *Maximizing study abroad: A students' guide to strategies for language and culture learning and use*. Minneapolis, MN: Center for Advanced Research on Language Acquisition, University of Minnesota.
- 経済産業省 (2010) 「産学人材パートナーシップ グローバル人材育成委員会報告書-産学官でグローバル人材の育成を」
<http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf>
(2018年7月5日アクセス)
- 津村俊充 (2012) 「プロセス・エデュケーション 学びを支援するファシリテーションの理論と実際」金子書房
- 文部科学省 (2011) 「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」 Retrieved from
<http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf> (2018年7月5日アクセス)
- 東京学芸大学(2017) 「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度文部科学省委託事業報告書
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/28file/report28_all.pdf> (2018年7月9日アクセス)